

## 道路20 四国新道(伊予新道)(愛媛県)

資料名	ストック効果に関する記述
愛媛県史編さん委員会編「愛媛県史 地誌 I (総論)」(愛媛県、1983年)、601頁	四国新道 (中略)この新道は現在の国道三二号線(高松市と高知市間)と三三号線(高知市と松山市間)であつて、明治一十九年(一八八六)に工事が開始され、三坂峠の開削などを経て二七年(一八九四)に完成した。この四国新道は、構造規格が当時としては画期的なもので、質量ともに四国の近代道路の先駆となった。
久万町誌編集委員会編「久万町誌」(久万町、1968年)、415頁	四国新道 (中略)明治一四年松垣伸が上浮穴郡郡長として赴任すると、直ちに、四国新道開さくの急務を説き、明治一七年愛媛・高知両県知事の間、四国新道開さくの議のあることを聞き、以来、寝食を忘れてこの大事業の成立につくし、ついに明治二五年八月完工したのである。 (中略)このように先祖の残した偉業は県道となり、やがて国道に昇格し、地方産業開発に、文化向上に大きな役割を果たしたのである。
久万町誌編集委員会編「久万町誌 増補改訂版」(久万町、1989年)、447頁	四国新道 (中略)明治一四年松垣伸が上浮穴郡郡長として赴任すると、直ちに、四国新道開さくの急務を説き、明治一七年愛媛・高知両県知事の間、四国新道開さくの議のあることを聞き、以来、寝食を忘れてこの大事業の成立につくし、ついに明治二五年八月完工した。 (中略)このように先祖の残した偉業は県道となり、やがて国道に昇格し、地方産業開発に、文化向上に大きな役割を果たしたのである。

## 道路20 四国新道(伊予新道)(愛媛県)

資料名	ストック効果に関する記述
大倉一夫「備讃の海に橋を架けよ」(財田町役場、1988年)、113-114頁	<p>四国新道のもたらした開発効果</p> <p>愛媛県上浮穴郡の「浮穴史談」第三号は、四国新道について次のように述べている。</p> <p>「以前は土地嶮峻のため交通開けず。只駄馬の一部通ずるのみにして、荷物の運搬甚だ困難を極めたりしが、明治二三年国道開通し、交通便利となると共に落出部落は貨物集散の場所となり、人家漸く増加し、……明治二四年国道開通し、為に落出部落なる。国道は伊予土佐往来の要路にして、落出は両国の中間に当るを以て郵便電信局、駐在所、学校、酒造家、宿屋、雑貨屋建ち並び稍繁昌せり。以前は谷間の人跡稀なる地なりしなり。」</p> <p>また、「弘形村誌」は次のように述べている。</p> <p>「……然るに明治二一年松山高知間の県道開通してより、本村の交通頓に発達し、車馬往来を得るに至れり。……県道に沿える河口、久主の下成ル等は、県道開通以来日に開け、米麦その他日用品の取引行はる。特に製茶の候は其売買盛んなり。」</p> <p>久万町の三坂峠にあった「明神村」の村誌にも、次のような記述がある。</p> <p>「三坂は実に天下の險たりき。明治維新となりても依然として旧態のままなりしが、後県道に編入され明治二一年車道開通便利となれり。……車道開通するや利源の開発されたるもの枚挙に遑なく、今や運輸交通共に稍至便となり輻輳の音昼夜絶えず。……車道開通農閑の時期は副業として、当地松山間を貨物運搬用として専ら馬を使役せしを以て牡馬の飼養多く且牝馬の飼養者もありしが、新道開通後は、運搬用に専ら牛を使役するに至りしを以て俄に牛を飼養するに至れり。」</p> <p>思うに、四国新道は有史以来交通が遮断され、孤島化した四国の内陸部に変革を起させた。明治初期まで閉鎖社会であった地域を交通の変革でもって開放しはじめたのである。四国山脈に囲まれた僻地にも人の流れが生じ、輸送手段の変化によって物資の輸送量が急増し、人と物の流れの拠点地は人家や事業所が張りつき、商業が芽生え、生産活動も活発になった。現在と同じく交通基盤整備のもつ開発のインパクトが四国新道に顕著に現われている。</p>
大倉一夫「備讃の海に橋を架けよ」(財田町役場、1988年)、116頁	<p>鉄道建設の誘発 (中略)</p> <p>諶之丞の交通基盤整備による地域開発の構想は、四国新道を開削することによって多くの人びとを啓発した。四国における鉄道の建設も、四国新道開削が大きな影響を及ぼしている。</p>